

蛇

森鷗外

青空文庫

明け易い夏の夜に、なんだつてこんなそうぞうしい家に泊り合
わせたことかと思つて、己おれはうるさく頬ほおのあたりに飛んで来る蚊
を逐おいながら、二間の縁側から、せせこましく石を据えて、いろ
いろな木を植え込んである奥の小庭を、ぼんやり眺めている。

座布団かたわらかやりの傍に蚊遣の土器が置いてあつて、青い烟けむりが器うがに穿うつて
ある穴から、絶えず立ち昇つて、風のない縁側で渦巻いて、身の
まわりを繞めぐつてゐるのに、蚊がうるさく顔へ来る。夕飯ゆうめしの饌ぜんに
附けてあつた、厭いやな酒を二三杯飲んだので、息が酒の香がするか
らだろうかと思う。飲まなければ好よかつたに、咽のどが乾かわいていたも
んだから、つい飲んだのを後悔する。

ここまで案内をせられたとき、通つた間数を見ても、由緒のありげな、その割に人けの少い、大きな家の幾間かを隔てて、女のべつにしやべっている声が、少しもと切れずに聞えているのである。

恐ろしく早言はやことで、詞は聞き取れない。土地の訛なまりの、にいと云う弓爾波てにはが、数珠の数取りの珠のように、単調にしやべっている詞の間々に、はつきりと聞こえる。東京で、ねえと云うところである。ここは信州の山の中のある駅である。

暫く耳を済まして聞いていたが、相手の詞が少しも聞こえない。しばら女は一人でしやべっているらしい。

挨拶あいさつに出た爺じいさんが、「病人がありました、おやかましゆ

うございましょう」と、あやまるように云ったが、まさか病人があんなにしやべり続けはすまい。

もしや狂^{きちがい}人ではあるまいか。

詞は分からないが、音調で察して見れば、何事をか相手に哀願しているようである。

遠いところでぼんぼん時計が鳴る。懐中時計を出して見れば、十時である。

月が小庭にさしている。薄濁りのしたような、青白い月の光である。きのう峠^あで逢った雨は、日中の照りに乾いて、きようは道が好かつたに、小庭の苔^{こけ}はまだ濡^ぬれている。「こちらが少しはお涼しゅうございましょう」と云って爺いさんに連れて来られた黄^た

昏そがれに、大きな蝦蟇がまが一疋いっぴきいつまでも動かずに、おりおり口をぱくりと開けて、己の厭がる蚊を食つていたのを思い出して、手ち水鉢ようずばちの向うを見たが、もうそこにはなんにもいかなかった。

この縁側の附いている八畳の間には、黒塗の太い床縁とこべりのある床の間があつて、黒ずんだ文人画の山水が掛つている。向こうに締め切つてある襖ふすまには、杜としょうりょう少陵の詩が骨々しい大字で書いてある。何か物音がするように思つて、襖の方を見ると、丁度竹の筒を台にした、薄暗いランプの附いている向うの処で、「和氣日融々」と書いてある、襖が開いて、古帷子ふるかたびらに袴はかまを穿いた、さつきさつきの爺いさんが出て来た。

「あちらへお床を延べました。いつでもお休みになりますなら。」

「そうさね。まだ寐られそうにないよ。お前詞が土地の人と違
じやないか。」

「へえ。若い時東京に奉公をいたしておりましたから、いくらか
違いますのでございましょう」と云つて、禿はげた頭を搔かいている。
次第に家の内がしんとして来るので、例の女の声が前よりもは
つきり聞える。己は覚えぬ耳を傾けると、爺さんがその様子を見
て、こう云つた。

「どうも誠に相済みません。さぞおやかましゆうございませう
。」

爺いさんのこう云う様子が、ただ一ひととお通りの挨拶ではなく、心しん
から恐れ入っているらしいので、己は却かえつて気の毒に思った。しか

しそれと同時に、聞けば聞く程怪しい物の言い振りなので、*indiscret* 《アンジスクレエ》なようだとは知りながら、どうした女だか聞いて見ようと決心した。

そうとは知らない爺いさんは、右の手尖^{てさき}だけを畳に衝^ついて、腰を浮かせた。そして己の顔を見て云った。

「もう何も御用は。」

「そう。別になんにもないのだが、お前の方で忙しくないなら、少し聞いて見たいことがある。」

「いえ。どういたしまして。どうぞなんなりとも仰^{おっし}やつて下さいますように。」腰はまた落ち着けられた。

「どうだい。ここいらでは夏でもそんなに遅くまで起きてはいな

いのだろうが、こうしてお前を引き留めて、話をしても好いかい。」

「へえ。こちらなぞでは、宿屋と違ひまして、割合いに早く休みまするが、わたくしはどうせ今夜も通夜つやをいたしまするのでございます。」

「通夜をするというのかね。それは近い頃ころ不幸か何かあつたのだね。」

「へえ。主人の母親が亡くなりましてから、明日で二七日ふたなぬかになりますのでございます。」

「ふん。さつき聞けば病人があるそうだし、それに忌中では、さぞ宿なんぞ引き受けて、迷惑な事だろうね。実に気の毒な事をし

た。しかしもう御厄介になりついだから為方がない。縁側は少し涼しいから、まあ、ちつとこちらへ来て話したら好いだろう。」

「難ありがと有うございます。いえ。県庁からお宿を仰おおせつ附けられましたのは、この上もない名誉な事でございます。こういうところへお留め申しまして、さぞ御迷惑でございますようが、当家ではこれもお上かみへ対しまして、報恩の一つでございますから。」

爺いさんはこう云いながら、蚊遣の煙の断え断えになったのを見て、袋戸棚から蚊遣香を出して取り換えて、そのままそこに据わった。そして己が問うままにぽつぽつこんな事を話した。

この穂積ほづみという家は、素もと県で三軒と云われた豪家の一つであ

る。

亡くなつた先代の主人は多額納税者で、貴族院議員になるところであつたが、病気を申し立てて早く隠居してしまつた。佐久間さくまぞう象山うざん先生を崇拜して、省せいけんろく録ろくを死ぬるまで傍そばに置いていた。爺いさんは、「なんとかいう、歌を四角な字ばかりで書いてある本」だと云つた。

それでいて仏教の信者であつた。なんでもこれからの人は西洋の事を知らなくては行けない。しかし耶蘇教やそきようになつてはならない。耶蘇教の本を読んで見たが、皆浅はかなもので、仏教の足元にも寄り附けないと云つていた。それで自分なぞにも、不断仏教の難有い事を話して聞せた。それは別にむずかしい事ではない。

ただ四恩というものを忘れずにいれば、それで好いと云う事であつたと、爺いさんは云つた。なるほどさつきも、国家の義務だともいふようなところを、「報恩」だと云つたつけど、己は思い合せた。

先代の妻は実に優しい女で、夫の言うことに何一つ負そむいた事がない。そして自分を始め、下々しもしものものをいたわつて使つてくれた。あすで二七日ふたなぬかになるといふのは、この女の事である。八十歳の長寿をして、こないだ死ぬるまで、毎日十人ずつの乞食こじきに二十五錢ずつ施すことになつていたので、近年は郡役所で貧窮こじきのものを調べて、代り代り貰いに來させることになつていた。若い奉公人の中には、「御隠居様のお客様」と云つて、蔭で笑うものが

あつたが、貰いに来るものの感情を害するような事をしたものはない。

この夫婦の間にどうしたわけか子がないので、ひどく歎いていると、明治の初年に奥さんが四十になって妊娠した。夫婦は大層喜んだが、長野から請待しやうたいした産科のお医者さんが、これまで四十の初産ういざんは手掛けたことがないと云つて、眉まゆを顰ひそめたそうである。それでも無事に今の主人は生れた。小学校というものが始めて出来た頃に、好く物が出来るといふので、県庁までも知られていた。その頃自分は商人になろうと思つて、主人の取引をしている、日本橋といやの間屋へ奉公に出た。小僧の時から奉公したのではなくては使わないというのを、主人の保証で番頭の見習をさせて貰つた。

西南の戦争の時、問屋が糧秣品りようまつひんを納めて、大分の利益を見てから、四五年立つた時であつた。いつか故参になつた自分は、女房を持たせて、暖簾のれんを分けて貰うことになつて、先代の穂積の主人が卒中して、六十五歳で頓死とんしした。聞き取りにくい詞で、「跡の事は清吉に頼め」と云つたのが、御隠居さんにやつと分かつたということである。

自分は取るものも取りあえず、この土地へ歸つて来た。御隠居は五十を越しているのに、今の主人はやつと長野の中学校に這入はいつたばかりである。それからというものは、穂積家一切の事を引き受けて、とうとう一生独身で暮したのである。

好い子だと評判せられていた今の主人は、段々大きくなるに連

れて、少し弱々しい青年になった。学校の成績は相変わらず好い。是非学士にすると云っていた、先代の遺志を紹ついで、御隠居が世話をしていた。先代の心安くした住職のいるある寺に泊って、中学に通っている主人の、暑中休暇や暮の休暇に帰って来るのを、御隠居は楽しみにしているのであった。

その頃から今の主人はどうも体が悪い。少し無理な勉強をするめまいと、眩暈がして卒倒する。講堂で卒倒して、同級のものに送られて寺へ帰ることなどがあった。

それでも中学は相応に卒業したが、東京へ出て、高等学校の試験を受けることになってから、度々落第して、次第に神経質になった。無理な事をさせてはならないというので、傍はたから勧めて早

稲田に入れることにした。それからあきらは諦めて余り勉強をしない。

そのうち適齢になったので、一年志願兵の試験を受けたが、体格ではねられた。丁度日清戦争のある年に、早稲田の方が卒業になつて歸つた。

もう一人前の男になられたからと思つて、これまで形式的に御隠居に伺つていた穂積家の経営の事を、そろそろ相談し掛けて見ても、「清吉、お前に任せるから、これまで通りに遣つてくれ」と云つて顧みようともしない。そんなら何か熱心に行っている事があるかと思つて、気を付けて見ても、分からない。もう六十を越していた御隠居には優しくして、一家の事は自分に任せているので、至極結構な御主人ではあるが、どうも張合のないような気が

して来た。

もつと尤も不思議に思つたのは、東京から歸つた翌年、二十四歳で今の奥さんを迎えた時の事である。身代は穂積家より小さくても、同郡で旧家として知られている家の娘に、これも東京に出て、高等女学校を卒業して歸っているのがあつた。いつか越後えちごの人がこの娘を見て、自分の国は女の美しい国だが、お豊とよさんのように美しいのは、見たことがないと云つたそうである。お豊さんの小さいとき、祭礼やなんぞで、穂積の今の主人と落ち合うことがあると、穂積の千足ちたるさんとお豊さんとは好い夫婦だと、人が好く擲か揄ちつたもので、両家でなんの話もないのに、お豊さんが東京へ稽古けいこに行けば、あれは千足さんの処に嫁入をするとき、負けてはなら

ぬから行くのだなどという噂うわささえあつた。それが十八になつて、穂積の息子と前後して都から歸つたのである。そこで二人の結婚はほとんど周囲から余儀なくせられたような有様であつた。今の主人はこの相談を母にせられたとき、どうでも好いと云つた。母の方では、東京のような風儀の好くない土地にいて、女の事について何事もなかつたせがれの、遠慮深い口から、どうでも好いというのは、喜んで迎える気になつているのだと思つて、直ぐに話を運ばせた。先方では待つていたらしかった。殊に娘さん自身が待つていたらしいということさえ、媒なこうど人の口から穂積家へ伝えられた。見合いの済んだ頃には、珍らしい良縁だと、長野の新聞にまで出て、穂積の親類は勿論もちろん、知らぬ人まで讚ほめて、羨うらやんで、妬ねた

んで、騒いでいる中に、ただ清吉爺いさん一人は、若い主人の素そ振ぶりが腑ふに落ちないように思った。それは自分に問屋の主人が女房を持たせると始て云つた時の事に思い較べて見たからである。自分はその時もう三十五になつていた。それまで死に身になつて稼いだので、女と聞いて胸の轟とどろく時は徒いたずらに過ぎ去つて、心が落ちて着いていた。それでもただ女房を持たせられると聞いたばかりで、どこの誰たれという当てもないのに、二三日の間はそわそわして物が手に附かなかつた。主人のどうでも好いと云うのが、隠居の思うように、遠慮しての口上なら好いが、どうも素振までがどうでも好さそうに見える。稼業の事もどうでも好い。女房の事もどうでも好い。そんなはずはないがと、自分だけは思ったのである。

婚礼は首尾好く済んだ。翌朝の事である。朝飯の膳ぜんが並んだ。これまでは御隠居と若い主人とが上かみに据わる。自分は末座つらなに連つて食べることになつていた。これは先代の主人が亡くなつた年からの為しきた来りである。御遺言なみもあり、並なみの奉公人でないからというので、御隠居がこう極めたのである。後家の身の上ではあるが、もう六十になつてゐるから、遠慮はいるまいということであつた。親類には口のやかましい人もあつたが、こういう事に非難も出なかつた。その朝は主人が真中にいて、両側に御隠居と嫁さんとが据わつた。美しい嫁を取つたのが嬉しいうれと見えて、御隠居が樂しげに主人に話し掛ける。主人が返事をする。嫁さんは下を向いて聞いていたが、ろくに物も食べずに、誰よりも先に黙つて席を立

ってしまった。自分は向いで見ていたが、多分極まりが悪いので立ったのであろうと思った。御隠居も主人もそう思ったことであろう。

しかし午もひる晩も同じように、嫁さんだけ早く席を起つた。その次の日からは、用事にかこつけて、嫁さんは遅れて食べに出る。主人がなぜかと思つて問うと、どうもお母あ様のお話が嫌いではないと云う。これは穂積家に限つてある事で、食事の時は何か近郷であつた嘉言善行かげんというような事を話すことになっている。先代の主人のした流儀が残つていたのである。丁度新聞紙の三面記事の反面のような話である。もし、これという出来事がないと、誰でも前日あたりに本か何かで読んだとか、人に聞いたとかいう

話をする。そのために人の話を聞くにでも、本を読むにでも、食事の時の話の種子たねになるような事柄に耳を留めて聞く、目を留めて見るということになっているのである。

主人も不思議に思った。善行嘉言なんぞというものは、人によつては聞いて面白くないということもあるう。しかし別に聞くに堪えないというわけのものではない。うるさくても辛抱していられないはずはない。なぜだろうと云うので、嫁さんに問うて見た。そうすると、あんな偽善の話は厭いやだと云ったそうである。

その事を聞いてから、御隠居は詞ことば少なに、遠慮勝ちになった。話されないととなると話して見たいように感ずるのが、人情の常である。それを我慢する。我慢するのが癖になって、外の話のした

いのをも我慢する。

穂積家は沈黙の家になった。

ここまで話を聞いた時、さつき清吉爺いさんの出て来た、「和気日融々」と書いてある襖が、またすうと開いた。

見れば薩摩飛白さつまがすりに黒紹くろろの羽織を着流した、四十恰かっこう好の品のいい男が出た。神経の興奮しているらしい声で、こう云った。

「わたくしは当家の主人で、穂積千足と申すものです。先生がお泊り下さいましたに、御挨拶にも出ずにいて、突然お席に参ったのですから、定めて変な奴やつだと思おぼしめ召すでしょうが、全く二週間ほど前から気分が優れませんで、休んでいました。県庁からの指

図で、郡役所から通知のありました時も、忌中ではあるし、お断り申そうかとも考えましたが、近来不為ふしあわ合せな事が続きまして、この老人が大層心寂しく存じている様子でして、名高い学者の方に泊ってお貰い申したら、何か心得になるような事が伺われるかも知れないと申すのです。それで御迷惑かとは存じながら、お宿をお引受け申しました。先刻から清吉が色々お話をいたした様子ですが、わたくし共一家は実に悲惨な境遇に陥っているのです。わたくしは今少し前に、お次まで参っていました。教育を受けたものが、立聞きをしては悪いということ位は、わたくしも知っています。しかしお迎いにも出ず、御挨拶にも出ずにいて、突然伺うのが、余り不躰ぶしつけな様ですから、躑ちゆうちよ躑ちよしていただきます。清

吉じじいの申す通り、わたくしは小さい時から母に苦勞を掛けていながら、母を寂しい家で死なせてしまいました。それは物質的な奉養は出来るだけ尽した積りです。しかし母は晩年になって、わたくし共夫婦のために、恐ろしく寂しい生活をしたのです。そんなら妻を離別したら好かろうと、人は云うでしょうが、それがそう容易く行くものではありません。どう云うわけか長い間子がなくている妻ですから、それを離別する程容易な事はない様です。しかし民法もある世の中ですね。妻にこれと云つて廉立かどった悪いことはありません。母に優しくない。それだと云つて、別に手荒い事もしない。よしやわたくしが離別しようとしたって、妻は勿論同意しません。妻の積りでは、こうして一日一日と過すうちに、

いつかは楽しい生活に入る時が来るだろうと思つていたのです。妻がそう云う風で、合意が成り立たないのに、わたくしがどうしようと思つたつて、里方の親類が承知しません。何をわたくしは理由にしましょう。話をたんとしない。それがなんの理由になりましょう。無論法廷で争う理由なんぞにはなりません。その上世間体ていというものもあります。穂積という家は、信州では多少人も知つている旧家です。その内輪を新聞に書かれたくはありません。そういう次第で、とうとう十四五年というものが立つてしまつたのです。清吉じじいなんぞは、こんな律儀な男で、それに非常に耐忍力が強いのですから、黙つて内の事をしていてくれましたが、腹の中ではわたくしを意気地がないように思つたり、妻に惑溺わくでき

しているように思ったりしているようです。わたくしは決して惑溺なぞはしていません。ただ薄志弱行だと云われれば、それだけはいたし方がありません。それにはわたくしに極きまった人生観が無いのが原因になっています。わたくしは病身で大学には這入はいることが出来ませんでした。色々な学科を修めました。何かわたくしの生活の基礎になるような思想があつて、それを貫くためには、いかなるものをも犠牲にするという気になられたならば、これまでにか解決が附いたのでしよう。世間の毀誉褒貶きよほうへんは顧みない。人が死んでも好い。自分が死んでも好いと云う事なら、解決が附いたのでしよう。それが無いので、今にぐずぐずしているのです。そして母はどうとう亡くなってしまふ。妻もあんな風

に気が狂ってしまふ。わたくしもどうなるか知れませぬ。」

主人の血走つた目は、じいっと己の顔に注がれている。己はぞつとした。清吉爺いさんだけは腕組みをして俯向うつむいている。十一時の時計が鳴つた。

「そんなら、さつきまで声のしていたのが奥さんですね」と、己は問うた。

「そうです。いつでも十一時前まではあの通りです。幻覚か何かがある様子であんな工合にしゃべり続けていて、草臥くたびれ切るまでは寐ないのです。」

「なるほど。清吉さんの話では、奥さんが嘉言善行というような話が嫌いだと云つたのが、内輪の面白なくなる初めだというこ

とでしたが、一体どういうわけだったのですか。」

「実に馬鹿げ切っているのです。妻の考では人間に真の善人というものは無い。もし有るとしても、広い国に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいうもので、實際附き合っている人の中には、そんなものの有りようがない。善い事をしたり言ったりするというのは、ためにする所があるので、自分を利するのである。

卑劣である。これに反して、悪い事は誰もしたい。しかしそれを吹ふいちちよう聴きするには及ばないから、黙っている方が好い。よしまた言うにしても、悪い事の方なら、正直に言うのであるから、虚偽でもなければ、卑劣でもないと言うのです。わたくしは妻が優しい顔をして、美しい声でそんな事を言うのですから、馬鹿らしく

もあり、不思議にも思っていました。そのうちに妙な事があつたのです。去年でしたか、東京にいた頃、学校で心安くした友人が温泉へ来たといふので、わたくしの所へ寄りました。その男がこう云う事を言つたのです。妻を持って子供が沢山出来た。ところが、その妻が authority 《オオソリチイ》 というものを一切認めぬ奴で、言う事を少しも聞かない。それでは親に濟むまいとか、お上に濟むまいとか、神様に濟むまいとか、仏に濟むまいとか、天帝に濟むまいとか云おうとしても、どれもこの女に掴つかまえさせる力ちからぐさ 草にはならない。どうも今の女学校を出た女は、皆無政府主義者や社会主義者を見たような思想を持っているようだ、そう云うのです。その時はわたくしもこの男は随分思い切つた事

を云うと思つて聞いていましたが、好く考えて見ると、わたくしの妻などもオオソリチイは認めません。事によると、今の女はまるで動物のように、生存競争のためには、あらゆるものと戦うようになっていゝるのではないでしようか。一体どうしてこんな風になつて来たのでしよう。」

「打遣うっちゃつて置けば、そうなるのです。赤ん坊は生れながらの

[e'goiste] 《エゴイスト》ですからね。」

「しかしどうして男とは違ふのでしよう。」

「それはなんと云つても、男の方は理性が勝つていゝるのでしよう。君はさつき人生観を持つていないと云われたが、持つていないと云つても、社会に立つての利害関係は知つていゝる。利己主義ばか

りで推して行けば、自分の立場がなくなるということとは知っていない。Dogma 《ドグマ》は承認しない。勿れ勿れの教には服せない。しかし利害の打算上から、むちやな事はしない。女だって理性の勝っている女は同じ事でしょう。ただそんな女は少いのです。人間は利害関係だけでも本当に分かっているれば、むちやな事は出来ない。キリストの山の説教なんぞを高尚なように云うが、あれも利害にうったているのですからねえ。」

「なるほどそうです。赤ん坊は赤い物に目を刺戟せられれば、火をでも攫む。それと同じように、女は我慾を張り通して、自分が破滅するのですね。」

「まあ、そんな物でしょう。だから、赤ん坊を泣かせて、火を攫

ませないようにする。赤ん坊を大人と一しよには扱わない。無政府主義者でも、社会主義者でも、下の下^げまでの人間を理性のある人間と同一に扱おうとしているから間違っているのです。一般選挙権の問題でからがそうです。多数政治なんというものも、将来これに代るべき、何等^{なんら}かの好い方法が立てば、棄てられてしまうかも知れません。詰まり [e'galite'] 《エガリテエ》という思想が根本から間違っているのですね。女だつて遠くが見えないために、自分の破滅を招くような事をすれば、暴力で留めなくてはならないでしょう。」

「先生はそうお思いですか。独逸^{ドイツ}では小学校の教師に鞭^{むち}で生徒を打つことが許してある。それから夫たるものは妻に打つても好い

ことになっているとか聞きましたが、先生のお考では、あれも差さしつかえ支しがないのでしょうか。」

己は覚えほほえず微笑ほほえんだ。「わたしなんでもそれ程まで踏み込んだ考を持つているわけではありませんよ。先頃もフランスで誰やらが、英国の答刑ちけいが好結果を奏していると新聞に書いた。すると、Bernard 《バアナアド》 Shaw 《ショオ》 がわざわざはんぼくしよ反駁書を出しました。兎とに角打かくつなんということは非常手段ですから、教師だから打つても好い、夫だから打つても好いというように、法則にして置くのは不都合でしょう。」

「なるほどそうでしょう。兎とに角かくわたくしもある場合には打つても好いという位な、堅固な意思を持っていましたら、可哀相に妻

をあんな物にはしませんでしたらう。ああ、亡くなった母も気の毒ですが、妻も実に気の毒です。」

主人はじつと考え込んでいる。

己は問うた。「一体気の変になられたのは、どう云う動機からですか。」

腕組みをしていた清吉爺いさんが、手をほぐして膝を進めた。

「実に申し上げにくい事でございますが、先生が理学博士でいらつしやると承りまして、お泊りを願うことが出来ましたら、それを伺つて見たいと存じておりましたのでございます。初七日の晩でございました。奥さんが線香を上げに、仏壇を覗かれまして、大きな蛇のとぐろを巻いていましたのが、鎌首かまくびを上げて、じつ

と奥さんの顔を見たそうでございます。きやつと云つて倒れておしまいになりましたが、それから只今のようにおなりになりました。わたくし共も驚きまして、若い者の中に好く蛇などをいじるものがございますので、掴まえさせまして、野原へ棄てに遣りました。主人は新しい学問もいたしているものでございますから、なに、蛇というものは気圧なんぞを鋭敏に感ずるものだから、暴風雨の前なんぞには、馴れた棲家すみかを出て、人家に這入り込むことがあるそうだ。仏壇にいたのは、全く偶然だと申しおりました。ところが、翌朝よくちようになつて仏壇を見ますると、蛇はちゃんと帰つていたのでございます。わたくしも此度このたびは前より一層驚きましました。なんでもこんな事を下々しもしもに聞かせてはならない。昨日奥

さんの御病氣になられたのでからが、御隠居様を疎々しくなされた罰だなんぞと囁き合っているらしい。こんな事を知つたら、なんとというか分からないと存じますから、それからはお仏間には人を入れないようにいたしております。実はこれにおられまする主人には、直ぐに相談いたしました、なに、あんなきたないものをいじらなくとももの事だ、いつか逃げてしまうだろうと申して取り合いません。迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥じ入りまする次第でございますが、先生がお出でになりましたら、伺つて見たいと存じまして。」

主人は苦々しそうな顔をして、黙っている。

「今でもいるのか」と、己は爺いさんに問うた。

「はい。じつといたしております。」

「そうか」と云つて、己は話をする間飲んでいた葉巻を棄てて立つた。「一寸ちよつとわたしに見せて貰いましょう。」

爺いさんは先きに立つて案内する。仏間に入つて見れば、二間幅の立派な仏壇に、蠟燭ろうそくが何本も立てて、大きい銅の香炉に線香が焚たいてある。真ん中にある白い位牌いはいが新しんぼとけ仏なのであろう。香炉の向うを覗いて見ると、果して蛇がいる。

大きな青大将である。ひどく栄養が好いと見えて、肥満している。尾はずん切つたようなのが、とぐろを巻いている体の前の方へ五寸ばかり出ている。

己は仏壇の天井を仰いで見た。幅の広い、立派な檜ひのきの板で張つ

であるのが、いつか反り返ったままに古びて、真黒になっている。

爺いさんは据わって、口の中にぶつみよう仏名を唱えている。主人は

somnambule 《ソナンビユウル》のような歩き付きをして、

跡から附いて来たのが、己の背後うしろにぼんやり立っている。

己は爺いさんを顧みて云った。「近い処に米の這入った蔵があるだろうね。」

「はい。直きひとま一間先きに、戸前とまえの廊下に続いている蔵がございませす。」

「そこから出て来たのだ。動物は習慣に支配せられ易いもので、一度止まった処にはまた止まる。外へ棄てても、元の栖家すみかに帰る。何も不思議な事はないのですよ。兎に角この蛇はわたしが貰って

行こう。」

爺いさんは目を円くした。「さようなら、若い者を呼びまして」。

「いや。若い者なんぞに二度とは見せないという、お前さんの注意は至極好い。蛇位はわたしだつて掴まえる。毒のある蛇だと棒が一本いる。それで頸くびを押えて、項うなじまで棒を転がして行つて、頭の直ぐ根の処を掴むのです。これは俗に云う青大将だ。棒なんぞはいらない。わたしの荷物の置いてある処に、きのう岩魚いわなを入れて貰つた畚びくがあります。あれをご苦労ながら持て来て下さい。」

爺いさんは直ぐに畚びくを持って来た。

己は蛇の尾をしつかり攫つかんで、ずるずると引き出して、ちゆう

に吊るした。蛇は頭を持ち上げて自分の体を縄を縋なったように巻いたが、手までは届かない。己は蛇を畚ふたに入れて蓋をした。

丁度時計が十二時を打った。

翌朝立つ前に、己は主人の妻をどんな医者が見ているかと問うてみると、長野から呼んだのも、精神病専門の人ではないと云った。己はこれ程の大家の事であるから、是非東京から専門家を呼んで見せるが好いと勧告して置いた。

(明治四十四年一月)

青空文庫情報

底本：「灰燼　かのように　森鷗外全集③」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集第一巻」筑摩書房

1971（昭和46）年4月6日

初出：「中央公論　第二十六年第一号」

1911（明治44）年1月

入力：田中陽介

校正：noriko saito

2015年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

蛇

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>